




浅見 咲綾 (あさみ さや) 松枝小 4年生

作品名：一人ひとりの責任

図 書：わたしのせいじゃない-せきにんについて-

学校の休み時間に一人の男の子が顔を手でおおい泣いている。周りの子達みんなが「自分のせいじゃない」と答える。最後は「わたしのせいじゃない？」としつ問が投げかけられ戦争やまずしい国の子ども、かんきょう問題や子どものへいしの写真で終わる。この本は、スウェーデンのレイフ・クリスチャンソンという人が書いた作品だ。

わたしはこの本を読んで親と話し合い、いじめについて真剣に考える事ができた。わたしの妹は片方の目が内側によってしまう病気で、よく他の子から「この子目が変」と言われる。言われた妹は本の中の男の子の様に顔を手でおおい泣きはしないが、固まって動かなくなり一言もしゃべらなくなってしまう。たしかに妹はみんなとちがう目をしているが自分なりにたくて目の病気で生まれてきたわけではない。自分が相手をきずつけるつもりがなくても言われた人の心がきずついたら、それはいじめとして成り立つ。自分が言った事や、やった事はもう消えない。だから自分の行動に責任を持たなくてはいけないと思う。前にわたしのクラスでもみんなから悪く言われたり無しされたりする子がいた。ある日、給食の時間に友達がわたしにその子の事をおもしろ半分が悪く言った事があった。でもわたしはその時、どうしたらいいのか分からず軽くうなづいてしまった。結局その子はその言葉にきずつき給食を食べなかった。今思うとあの時なげわたしは、友達に一言「そういう事を言ってはいけないよ」と言えなかったのかと後かいした。みんなそれぞれその時の立場はある。でも自分の行動を選べるのは自分だけだと思う。一人ひとりが少しだけと思ってやったり、無しをしたり見てみぬふりをしただけでも、それが大きな力になって一人を苦しめることになってしまう。大勢でやった場合も自分たちがした事の責任の大きさは変わらない。いじめはいじめてる側が百パーセント悪いのだ。親と話し合ってもう一つ大事な事が分かった。自分がいじめられる立場になってしまった時の事だ。もしそうなった時は一人でなやまずに、早めに親や信頼できる大人に相談するという事だ。いじめる側、いじめられる側、見ている側、それぞれ本人達だけでかい決しようとしてもそれはとてもむずかしい事だと思う。いじめられた時はいじめ



が大きくならないうちに大人に相談する事で問題のかい決が早くなると思う。世の中からいじめを無くすのはむずかしいだろう。けれどわたしはいじめが少しでもへらせるように自分の行動に責任を持ち思いやりの気持ちを忘れずにいたいと思う。一人ひとりが思いやりとやさしさを持つことができれば世界は大きく変わるだろう。